いかに建築空間は思考されるか 岡田哲史

第11回――特別編：林屋晴三氏に聞く
作為と無作為について[1]

[はじめに――林屋さんとの出会いと対談の目的]

林屋晴三氏のことは、お茶を嗜ったことのある人や茶陶に関心のある方なら、たいていご存じではないだろうか。今年米寿を迎えられた林屋さんは、日本の茶陶研究の第一人者である。東京国立博物館に在籍されていた当時は、「茶陶を世の中へ公開していったパイオニアの一人」として、「展覧会を通して陶磁研究への足掛かりを作った啓蒙家」として偉大なる足跡を残された[注1]。退官後は、名立たる美術館の館長や理事長などを歴任され、執筆に、取材に、番組出演にと多忙を極められる一方、ひとりの茶の湯者として多くの方々にお茶をふるまわれてきており、今日もなお引く手あまたの日々に東奔西走されている。

このたび、その林屋さんに対談をお願いすることとなったが、まずはそこへ至った経緯やその目的について説明しておきたい。ことの発端はきわめて個人的な出会いにあった。

本阿弥光悦(1558-1637)について、その名前を耳にされた方は多いことと思う。刀剣の鑑定、研磨、浄拭(ぬぐい)を生業とする家に生を受けた光悦は、書道を嗜む方にとっては「寛永の三筆」の一人として、陶器に関心を寄せる方にとってはその自由奔放な作陶によって魅力的な茶碗を世に遺した天才として尊敬を集めている[注2]。しかし、その光悦の手になる茶碗に信楽(しがらき)の土で焼かれたものは存在しないとされていること、そしてそれが今日のいわば常識となっていることまで知る人はそう多くはないだろう。さきほど「個人的な出会い」と書いたが、実は、林屋さんとの出会いは、私が表千家6代家元の覚々斎原叟の箱書きで「信楽光悦」とされた茶碗を所持していることにあった。茶碗の歴史においては存在するはずがないとされている、というか、在ってはならない茶碗が存在するわけだから、権威ある美術館の学芸員の眼からすれば、その「箱書き」のほうが誤っているのだろうという判断に短絡してもいたしかたないし、現にその短絡を実体験した私自身が言うのであるから間違いはない。「信楽光悦」の筆致など詮索するまでもなく、その字面を見るなり「ありえない」といった顔をする学芸員の判断は私の想像の域をでなかった。挙げ句の果てに「光悦のことなら、ひとり頼りになる専門家がいらっしゃいますからご紹介しましょう……」と言われる始末。そんな経緯で巡り巡って最後に行き着いた先が林屋さんだったのである[注3]。

林屋晴三氏

私自身、古い茶道具にはそれなりに思いを寄せてきたが、とりわけ茶碗は面白く、気に入ったものを幾碗か所持している。「建築を造ること」と「茶碗を作ること」は、スケールこそ異なるが通底するものを感じるからである。その「信楽光悦」と銘打たれた茶碗も、とりあえずは光悦に「信楽」がありえないことを弁えてのことであり、古道具屋の店先で「原叟の箱書きも何かの間違いだろう……」とつぶやきながら煙草銭同然で入手したものだった。こと怪しげな古物(こぶつ)に関しては、売る方も買う方もそうしたやりとりさえ興(ゲーム)のうちなのだ。とはいえ、その信楽茶碗を一目見るなり身震いするほどの悦びを感じたものだから、箱書きがどうであれ、あるいはかりに箱など付いていなかったとしても、単純に手許に置いて眺めていたいと思ったのである。

ところが一昨年、五島美術館で開催された光悦展で数々の光悦茶碗を拝見していらい、だんだんその「信楽光悦」が気になり始めてきた。茶碗の周辺に漂う空気感みたいなものに、どこかしら通じるものを感じたからである。そうこうするうちに、ついには最後の頼みである林屋さんを銀座にある事務所に訪ねることになったというわけである。しかし、さすがにそのありえない茶碗だけをお目に掛けるのは失礼千万と思い、それよりは遥かにましであろうと思われる茶碗も数碗お持ちした。そのなかには、直斎が極めた長次郎の黒茶碗や如心斎が極めた樂2代目常慶の香炉釉茶碗なども含まれていた[注4]。

結論から言えば、そうした素性の通ったお茶碗は、林屋さんにとってはまったくの蛇足であった。正直、私にとっても大きな驚きだったが、林屋さんの眼は当該の信楽茶碗だけに注がれ、何度も手の中でころがし、しげしげと眺めては「これはいいお茶碗ですね、光悦であろうがなかろうが実にいい、気に入った……。よくもまぁこんなシガラキがあったものですね……、『水の子』なんかよりずっといい!」と笑みを浮かべながら述べられた。せっかくの機会だったので、茶碗をめぐっていろいろ私見を述べたり質問させていただいたりもしたのだが、林屋さんがお話になる内容は、明らかに私の勉強不足のせいで半分もわからないものもあれば、ストンと腑に落ちるものもあり、初対面とは思えないほど心地よい時間が流れていた。

不思議なもので、林屋さんとはそれまで何の接点もなかったわけだから、極言すれば、モノに対する感覚だけでつながったと言っても過言ではない。しかしだからといって今後なにがあるわけでもなく、面談を終えたときにはもうお眼にかかる機会もないだろうと、正直そう思っていた。それからしばらくは、別れぎわに頂戴した『名碗を観る』を拝読する日々であった。ところがその著書を読み進めていくうち、70年以上にわたりお茶碗と向き合ってこられた林屋さんの言葉の数々に、茶碗に限らず、建築に限らず、人間がつくるもので所謂よきものに通底する本質(エッセンス)、もっと言えば普遍的なるものの何たるかを感じ入ることになるのである。「本書を拝読してからお会いしていれば、もっといろいろ訊ねることができただろうに……」と、残念至極の思いは幾度となく脳裏を過ったが、つまりはあとの祭りであった。

ところが数ヶ月経ったある日のこと、林屋さんから連絡が入った。「もういちどあの信楽を拝見ねがえませんか……。あのあとも、あのお茶碗が気になってしかたないのです……」と。再会の約束をしたのはもちろんのこと、2度目の面会では信楽茶碗の観賞もそこそこに、あれこれ深い話に感嘆しきりの再会とあいなった。以下の対談は、その再会がきっかけで実現に至ったものである。

権威と権力

岡田――先般は、長次郎や光悦、さらには志野や織部のお茶碗の話から千利休(1522-91)の待庵のことまで話

Fig.1：千利休｜長谷川等伯筆
［表千家不審庵蔵］

Fig.2：待庵

Fig.3：長次郎「無一物」｜
重要文化財［穎川美術館蔵］

Fig.4：長次郎「大黒」｜重要文化財
［個人蔵］

Fig.5：「君台観左右帳記」［東北大学付属図書館蔵］

が膨らみ、ついには「美しいものの本質とは?」といった問題まで含蓄のあるお話をうかがいました［注5］。そうした美の本質あるいはものの本質を観るというテーマは、私が専門とする建築の世界でも大きな問題としてあります。この対談ではそのあたりについてお訊ねしたいと考えております。［Figs.1-2］

しかしそうはいっても、いきなり建築の話から始めるのもあまりに唐突にすぎるでしょうから、やはりお茶碗の話から始めていくことになりますでしょうか……。

先生は長次郎のなかでも宗易（=利休）好みのお茶碗、とりわけ「無一物（むいちもつ）」や「大黒（おおぐろ）」といったお茶碗に「美」を見出していらっしゃいますね。作為のなかに無作為がある、と。利休の息のかかったものともなれば、当時からすでに所謂権威（オーソリティ）と重ね合わせて見られていたわけですが、そういったものではなくて……。［Figs.3-4］

林屋――まったく権威は見ませんね。そのものの存在感なんです。ところがそれは言葉にはならない世界にあるものですから……。

岡田――そういった存在感は、どこからきているのでしょうか?

林屋――やはり茶の湯の造形としては、今もって「待庵」が存在しているということが大事なことですね。15世紀まで、室町幕府の『御飾記』というのがあるでしょう、『君台観左右帳記』とか［注6］。当時は、そうした広い空間で唐物を鑑賞していたんです。しかし禅的な世界に足を踏み込んだ人間にとっては、「ああ、きれいだな……」で止まってしまうことに対しては納得がいかないんです。「美というものは、そんなものではないぞ」と。やっぱり想いの世界があるってことなんですね。［Fig.5］

まずは、やはり15世紀末の珠光（1422?-1502）でしょうか。そのあとに武野紹鷗（1502-55）とか、堺の町衆で財を蓄えていた人たちが出てきた。室町幕府の権威が低下していく一方で、地方の大名が徐々に力をつけてくるなか堺の町衆が侘び数寄の茶に共感を抱くんですね。その影響で信長をはじめ、こぞって侘び数寄に向かっていく。それでも、なぜ侘び数寄へ入っていったかという理由については、いろんなことを言う人がいるけれども、いまもって謎ですね。［Figs.6-7］

岡田――信長は唐や高麗の名物にほだされていましたね。堺に入ってくる南蛮渡来の変わりものにも……。

林屋――あの人は天才ですからね。しかし権威は認めない人です。力で押す権力がすべてだという考えの人だったんじゃないですか。

ところが「権威も大事なんだ」とする明智光秀に殺されてしまう。織田信長は権力を持たないと物事は成り立たないと思っていたのでしょう。彼は世の中を変えたかったんでしょうね。楽市楽座もそうですが、いわゆる室町幕府を中心とする中世末期の世界を覆えそうという思いがあった。それには権力が必要だったのです。そこで権力を振るおうとする場合に邪魔になるのが権威だった。権威というものは力がなくても成立するものですからね。だから、ついには天皇との関係を拗らせてしまうわけでね。

岡田――信長を間近で見ていた秀吉が天皇にすり寄っていったのは、それが反面教師になっていたんでしょうね。

林屋――権力を持ったから、次には権威を……。そこが信長と違うところで、やはり心が卑しいんですね（笑）。

茶の湯にしても、利休との出会いのなかで深まっていくわけですが、深まるにつれて利休さんよりも上になりたくなった。茶の湯の上でも権威を持ちたかったんです。秀吉には才能はありましたが、人間の出来が違うものだから……。結局、利休さんを潰してしまうしかなかったんでしょう。

待庵で、あのたった二畳の待庵で利休さんと秀吉が対座したら、利休さんの自ずからなる存在感に秀吉は圧倒されたでしょうね。秀吉が利休さんを凌げるのは権力だけだったわけです。それでも茶の湯の世界でも権威を持ちたいとなれば、その存在じたいが疎ましくなってしまう。

利休さんと秀吉は、お互いに共感を抱いていたんだと思うのです。ところが、秀吉が本当の権力を握った段階で、秀吉自身が変わってしまったんですよ。賢い秀吉から愚かな秀吉に変わっちゃった。天下を取りたいという意志は誰もが持っていたでしょう。「信長」という巨大で激烈な権力を、みんな羨望の眼差しで見ていたはずなのです。その思いが最も強かったのが秀吉だった。信長の死が世の中を変えましたね。

秀吉は自分に権威を持たせるために、天皇にお茶をさしあげようとします。そしてそのためにはどんなことをしたらいいだろうか、と。そこで「黄金」なんですね。黄金の道具から黄金の茶室まで。僕はそれを利休に工夫させたんだと思う［注7］。［Fig.8］

黄金は小座敷、つまり小さな空間でしか生きないじゃないですか。広い部屋を黄金で作っても、金屏風を並べてもだめなんです。黄金は使い方が肝心なんですね。古代エジプト以来、黄金は人間にとって大きな力、力の表現だと思うんです。僕も同じような黄金の茶室コピーを作って、そこに徳川家から黄金の台子をお借りして、座ったことがあるんです。やってみて、天皇の権威を奉る場として相応しいものだとつくづく思いましたよ。妙な空間です。非常な透明感がある、というか……。

岡田――何かが浮かび上がるというより、むしろ吸い込

まれていくような感じではないですか?

林屋——そう。それこそ「天皇」なんでしょうね。天皇という存在の不思議さと通じるものがある。日本人を考えるときには、やはり天皇について考えないと理解できないような気がしますね。権力ではないんですよ。あの権威はどうして保たれてきたのか。それは秀吉でさえ超えられない何か——おそらく歴史——なんでしょうね。

侘び数寄と禅

岡田——少し話を戻しますと、侘び数寄が醸成していくプロセスがその桃山期にあったわけですが、なにがそうさせていたのでしょうか。

林屋——やっぱり禅的精神でしょうね。利休さんも古渓宗陳(1532-97)のもとで30年も参禅していましたからね。しかし禅というのは一種の方便の世界ではないでしょうか。いろいろ難しい言葉を羅列して、煙に巻いて……。

岡田——でもその時代に「侘び数寄」が生まれてきたわけですから、その関係がまた不思議ですね。

林屋——ええ、そのとおりです。「侘び数寄」は方便ではないですからね。あの古渓宗陳とかね、利休さんが接した人たちは、やっぱりちゃんとした禅僧なんです。でもね、二面性を持っているとは思うのですが。

岡田——ところで先生、お茶碗は嘘をつかないですよね。

林屋——いや、いや、嘘つきますよ。だって、自然に灰がぱぁーっと被ってしまって「あぁー!」となったとするでしょ。あれが本当は「あぁー(しまった……)」なのに、それを「あぁー(いい景色だねぇ)」なんて言わせるところなんか……(笑)[注8]。

岡田——なるほど。

林屋——ある意味では方便なんですよ。

岡田——「ある意味では方便」。しかしそれでも、そんなふうにして、つまりは結果として出来上がったものに、ある種の精神性でしか捉えられない何かが宿るとしますね。どうやらそこに核心があるような気がするのですが。

林屋——そこへ至ったんですよ、利休さんが。

岡田——長次郎をして造らせた利休のお茶碗が今日存在しなければ、私たちはその判断基準さえ持てなかったということになりますね。

林屋——そう思います。

無作為の作為

岡田——それは、お茶室でいうと、やっぱり待庵になりますか……。

林屋——そう。やっぱり待庵。待庵が先か「無一物」が先か……。そのことがずっと気になっていて、昔からいろいろ議論してきましたが、何ともわかりませんわね。でも、きっと、ほぼ同じだったんでしょう。待庵が造られた年について、最近の中村昌生さんの説では天正11年(1583)となるらしいんです。天正10年に信長が本能寺に倒れて、天正11年に秀吉が天下人へと踏み出しますが、ちょうどその頃に造られたのでしょう。

岡田——利休の没年は天正19年(1591)ですから、完成から10年も経たないうちに亡くなられたことになりますね。

林屋——利休さんが初めてお茶を人に飲ませるお茶会をやるのが天文13年(1544)でしたか、いずれにしても20代の時です。利休さんは珠光が亡くなった後に生を受けていますが、珠光がやっていた侘茶っていうものに最初から共感を持っていました。それはやはり、参禅したことが大いに関係しているように思うんです。長次郎とは天正2年(1574)頃に出会っていたかもしれませんね。樂美術館に「天正二年春、命(メイ)により長次良(コレ)之を造る」と彫られた獅子があるでしょう?

岡田——前足で踏ん張りを利かせた獅子ですね。[Fig.9]

林屋——「天正2年」という年は、なにか意味のある年なんでしょうね。そこまでは遡れないと思いますが、天正2年の獅子に使われた土と「無一物」の土が同じところのものであったというのは興味深いことです。長次郎が利休さんと出会ってから、利休好みの造形、つまり「無作為の作為」の境地にたどりつくまでには時間がかかったん

Fig.6:武野紹鷗[国立国会図書館蔵]

Fig.7:村田珠光[国立国会図書館蔵]

Fig.8:黄金の茶室 | 実寸復元模型[MOA美術館]

Fig.9:長次郎「二彩獅子」| 重要文化財[樂美術館蔵]

Fig.10:長次郎「ムキ栗」[文化庁蔵]

でしょう。少なくとも「無一物」は、長次郎という作家の世界から生まれた茶碗ではない。利休の茶碗なんです。

岡田――『名碗を観る』の中で、「ムキ栗」は初期の作品ではないかと話されていますが……。[Fig.10]

林屋――ええ、前はそう思わなかったんです。四方(よほう)ですからね。

岡田――あのデザインは、奇をてらっていませんか。

林屋――利休さんは、四方と丸が好きなんですよ。「奇」ではないでしょう。

岡田――「奇」ではないのかもしれませんが、先生は実際に使われてみて「非常に飲みにくいお茶碗だ」と……。

林屋――そうなんです。

岡田――ということは、茶の基本を逸脱したところに何かを求めていたとは言えないでしょうか? それは「作為」になりませんか。

林屋――そうですね、相反するものを同時に求めているんですね。でもね、自ずからああいうところへいったのではないでしょうか。30年の参禅でそなわった禅の心ですね。利休さんの遺偈(ゆいげ)「人生七十、力囲希咄」は、普通の人間の遺偈ではないですね[注9]。やっぱり禅というものを、かなり深く、方便ではない想いの世界で受け止めて、そして茶碗とはどうあるべきかを追求しているうちに「無一物」のような作為を超えたものが生まれたんでしょう。人間がつくるものに作為が無いはずはないのですが、朝鮮から渡ってきた高麗茶碗には無作為の世界がある。ところが長次郎の茶碗は、作為を超えて無作為であろうとした。

岡田――人間のつくりだすものが「作為を超えて無作為であろうとする」こと。その謎に迫ることこそ今回の対談の核心と踏んでいるのですが、しかしそれがあっさりわかるくらいなら誰だって名碗を作ってこれたでしょうし、名建築を造ってこれたでしょう。作者の手を離れてもなおそこに美しく佇み続ける、しかも何百年にわたってもなお愛され続けるものに宿る本質(エッセンス)について。それはもはや作者が理性をもって捻り出すコンセプトやセオリーがどうこうといった次元の話ではないですね。「無一物」で言えば、あの佇まいは利休の感性を共有できた「長次郎」という作家、その身体をとおして自ずから生まれたものなのでしょう。先生は冒頭で「そのものの存在感」と仰いましたが、そのいわば品格はすなわち利休の人格が滲み出たものなのかもしれませんね。それを考えると、高麗茶碗が漂わせる「無作為の世界」は、私たちの問いかけに何か手がかりを与えてくれるかもしれません。というのも、高麗茶碗はマスプロダクションによる産物であったと聞いているからです。高麗茶碗の無作為性はそのことにも関係しているのでしょうか。雑器であったとも考えられているようですが。

林屋――マスプロですがね、しかし雑器ではないですね。ご先祖をお祀りするための祭器なんです。だから高台が高いでしょう。かつて韓国中央博物館の館長のチョン・ヤンモ(鄭良謨/元館長)さんと井戸茶碗について語らったことがあって、やっぱり祭器じゃないかって。僕もそれに同感なんですが、いまだに否定する人もいます。井戸茶碗には無作為の存在感がありますからね。雑器というものには存在感がないんです。それが雑器の特色だから。

Fig.11:高麗井戸茶碗「喜左衛門井戸」| 国宝[大徳寺孤蓬庵蔵]

Fig.12:唐物肩衝茶入「初花」| 重要文化財[徳川記念財団蔵]

岡田――確かに、井戸茶碗で日常の食事はしませんものね。

林屋――普通、祭器というものは大小セットになるんですね。だから高台の低いものもあるんです。ひとつには轆轤(ろくろ)で作るってこともあるのでしょうが、基本的にはご先祖を敬う精神が無作為の存在感を自ずから漂わせるんでしょうね[注10]。

岡田――要するに、そこには作者の「個」が消えていると言えるのでしょうか。

林屋――そう、「個」ではないんです。だからね、民芸(運動)をやった柳(宗悦)さんが、雑器だ、雑器だと言って、「喜左衛門井戸」をものすごく褒めていたんです[注11]。あの時代は、そういう捉え方しかできなかったんでしょうね。井戸茶碗が祭器ではないかと言いだすのは戦後でしたしね。「喜左衛門井戸」は無作為のなかから生まれた非凡と言えるもので、そのものの風格がそうさせているのでしょう。存在感ですね。雑器とは本来さりげないものなんですよ。そもそも存在感という意識がないところに民芸の面白さがあったわけですからね。民芸に作為が加わったら、民芸でなくなるわけですよ。例えば、柳さんは濱田庄司さんを陶芸家として非常に高く買っていた。濱田さんは民芸運動のアジテーターですが、でもね、彼が造ったものは民芸ではない。完璧に「濱田」という個性を持った作品なのです。それも一種の方便ですよね(笑)。[Fig.11]

岡田――そんな話を聴いてしまうと、昔も今も変わりませんね。権威が下す方便に多くの人々が靡(なび)いてしまうのは今も昔も同じです。その権威が天才であれば方便も輝きを増すのでしょうが、権威を背負わされてしまった凡人の屁理屈にはどうも胡散臭さが付きまとってしまいます。

林屋――秀吉は美の本質が直感的に判る人だったのではないでしょうか。信長は、人物そのものがわからない。

岡田――信長は名器を集めること=権力(イコール)と考えていました。手の中に納まるくらいの小さな茶入が、何万石とい

う価値を持っていたわけですからね[注12]。茶器が貨幣の代わりになっていた。[Fig.12]

林屋――そこが信長の面白いところです。しかしそれをまた家臣がありがたがるんですよ。要するに、中世の権力や権威とは違うんです。美しいかどうかはともかく、それまでになかったものに共感を抱いたわけですね。あのマントや帽子も、美しいかどうかわからない。

岡田――奇異なるものですね。

林屋――そう、「奇異なるもの」に対する共感ですね。それが非常に強い人なんではないですか? やはり下克上の顕れでしょうね。

岡田――それも権力の象徴になりうるというメンタリティなんでしょうね。

林屋――そうですね。信長って本当に面白い人ですね。それとね、舶来趣味ですよ。日本人は奈良朝の昔から舶来にはめっぽう弱いんですね。

岡田――建築の世界も同じです。

林屋――それは島国に生まれ育った日本人の特性ではないですか? 今でも、外国で名を上げたとたんに、日本のジャーナリストが騒ぎ出すとか。そうした愚かさが基本的にあるんですよ。

[以下、後編に続く]

[**注**]

1――林屋晴三ほか『名碗を観る』世界文化社、2011年、p.240:林屋さんが1990年に東京国立博物館在任中に関係された展覧会は200を超える。プロフィールの詳細は、同書の「茶碗と七十年 林屋晴三の半生」(pp.232-247)に掲載されている。

2――本阿弥光悦は、樂家2代目常慶および3代目道入(ノンコウ)と親交があり、当初は茶碗づくりの指南を受けていたが、やがてその自由闊達で型破りなデザインが道入以下今日に至るまで樂代々の陶工にも多大なる影響を与えてきた。

3――この過程で淡交社の滝井真智子氏には貴重な御助言等をいただきずいぶんお世話になった。ここに感謝の意を表したい。

4――直斎は堅叟宗守の斎号で武者小路千家7代家元(1725-82)、如心斎は天然宗左の斎号で表千家7代家元(1705-51)。

5――志野茶碗も織部茶碗も桃山時代に美濃で焼かれた茶碗。前者は長石釉の白肌に浮かぶ鉄絵が特徴。後者の名は古田織部の指導下で焼かれたことに由来し、個性的な歪みや絵付けで「へうげもの」の異名をもつ。

6――『御飾書』とは『小川殿 東山殿御飾記』の略称で、足利将軍家の座敷道具飾りの式法書。

7――黄金の茶室は、秀吉が関白に就任した翌年の天正14年(1586)1月、年頭の参内で御所に運び込まれ、正親町天皇に披露された。北野大茶湯でも披露され、文禄元年(1592)には大坂城から名護屋城へ運び込まれた。この茶室は当初より組み立て方式で構想されていたため運搬可能であった。壁、天井、柱、障子の腰をすべて金張にし、畳表は猩々皮、縁は萌黄地金襴小紋、障子には赤の紋紗が張られ、室内には黄金の台子と皆具が置かれたとされる。堀口捨己監修、早川正夫設計により復元された黄金の茶室は今日、MOA美術館に展示されている。

8――茶碗を焼いているときの様子が語られている。炎の中で真っ赤に焼かれた茶碗に予期せぬかたちで灰がかぶってしまった瞬間、困惑の心境であげた叫びが前者の「あぁー!」で、その偶然も一興と思い直し、茶碗の焼き上がりに慰みを込めた発言が後者の「あぁ、いい景色だねぇ」。

9――利休の遺偈(ゆいげ)の全文は以下のとおりである。「人生七十 力囲希咄 吾這寶剣 祖佛共殺 堤ル我得具足ノ一太刀 今此時ゾ天ニ抛」

10――茶碗の作陶は、大きく分けて轆轤によるものと手びねりによるものがある。樂茶碗や光悦茶碗は後者の方法により、基本的には一碗一碗を小さな釜に入れて焼くが、前者の場合は登り窯等を使って大量に焼くことが多い。

11――大井戸茶碗に分類される「喜左衛門井戸」は16世紀に朝鮮半島から請来され、侘びの茶の湯で賞玩されるようになった高麗茶碗の中で唯一国宝とされた茶碗である。詳しくは林屋晴三著「喜左衛門井戸に想う」『名碗を観る』pp.212-213を参照されたい。

12――例えば「楢柴」、「新田」、「初花」の銘をもつ茶入は「天下三肩衝」と呼ばれ、数寄に目覚めた戦国武将が垂涎の的とする大名物であった。信長は「新田」と「初花」を所有し、残りのひとつ「楢柴」を所持する博多の島井宗室に渇求したが、本能寺に倒れ叶わなかった。

[**林屋晴三**]

1928年、京都府生まれ。東京国立博物館次長を経て、現在同館名誉会員。頴川美術館理事長、前菊池寛実記念智美術館館長。少年の頃から茶の湯に魅せられ、長年、日本陶磁史における茶の湯文化の体系化に尽力してきた。旭日小綬章受章(2003)、織部賞受賞(2006)。現代作家の器による茶会も定期的に開催するなど現代の茶具の魅力を伝えることに心を傾ける。『名碗を観る』(世界文化社、2011)、『大正名器鑑 補説』(アテネ書房、1997)、『古陶磁のみかた 歴史と鑑賞』(第一法出版、1983)、『茶碗 茶の本』(新潮社、1978)、『日本のやきもの10 光悦』(講談社、1977)、『日本陶磁全集22 光悦 玉水 大樋』(中央公論社、1977)、『日本陶磁全集20 長次郎』(中央公論社、1976)、『世界陶磁全集5 桃山2』(小学館、1976)、『陶磁大系32 高麗茶碗』(平凡社、1972)、『茶道具の流れ』五島美術館編(木耳社、1966)、『やきものの美 日本陶芸の流れ』(河出書房新社、1960)、『日本の陶磁器』(社会思想研究会出版部、1959)、『陶器全集 第18巻 高麗茶碗』(平凡社、1958)ほか、茶碗や茶道具に関する著書、編著書多数。

[**岡田哲史**]

1962年、兵庫県生まれ。建築家、千葉大学大学院准教授。コロンビア大学大学院修了後、早稲田大学大学院博士課程修了。日本学術振興会特別研究員、文化庁芸術家在外研修員、コロンビア大学大学院客員研究員を経て、1995年、岡田哲史建築設計事務所設立。デダロ・ミノッセ国際建築賞グランプリほか、受賞多数。ヴェネツィア建築大学(IUAV)、ローマ大学サピエンツァ校(博士課程)、デルフト工科大学など、海外の主要大学でも建築デザイン教育に携わっている。主要著書:『ピラネージと「カンプス・マルティウス」』(桐敷真次郎/岡田哲史、本の友社、1993)、『建築巡礼32 ピラネージの世界』(丸善、1993)、『廃墟大全』(共著、トレヴィル、1997)、『ピラネージ建築論 対話』(G・B・ピラネージ著、岡田哲史校閲、アセテート、2004)など。2009年には、ミラノのエレクタ社より作品集『SATOSHI OKADA』(序文:フランチェスコ・ダルコ)が刊行されている。

[**いかに建築空間は思考されるか**]

1――過去と現在を相対化させること (CASABELLA JAPAN 833号)
2――起点としてのフランク・ロイド・ライト[1] (CASABELLA JAPAN 837号)
3――起点としてのフランク・ロイド・ライト[2] (CASABELLA JAPAN 838号)
4――起点としてのフランク・ロイド・ライト[3] (CASABELLA JAPAN 841号)
5――起点としてのフランク・ロイド・ライト[4] (CASABELLA JAPAN 842号)
6――アドルフ・ロース試論[1] (CASABELLA JAPAN 845号)
7――アドルフ・ロース試論[2] (CASABELLA JAPAN 847号)
8――アドルフ・ロース試論[3] (CASABELLA JAPAN 848号)
9――アドルフ・ロース試論[4] (CASABELLA JAPAN 849号)
10――アドルフ・ロース試論[5] (CASABELLA JAPAN 851/852号)
11――特別編:林屋晴三氏に聞く[1] (本号)